黄雪琴「声をあげないジャーナリストなんてありえない」

市民運動や人権活動を報じてきた彼女自身が、彼らと同じような運命を歩むとは思ってもいなかった。
原文 https://theinitium.com/article/20211026-mainland-huangxueqin

中國の調査報道のフリー記者でフェミニズムアクティビストの黄雪琴さん。筆者提供

特約ライター　旺旺　 シンガポール 2021 年 10 月 27 日

【編注】この記事は、端傳媒 InitiumuMedia と NGOCN 聲音計劃が共同で制作し、端傳媒に掲載されたものです。黄雪琴は、中国のフリーランスの調査報道ジャーナリストでフェミニズムアクティビストです。《新快報》、《南都週刊》などの国有メディアの記者を歴任し、その後フリーの記者になりました。2018 年には中国での #MeToo 運動の推進に深く関わり、多くの事件で被害者をサポートし、いくつものセクハラ反対アクションを呼びかけました。2019 年、彼女は香港のデモに参加し実名で報道記事を発表したことで、「騒動挑発罪」で刑事拘留され、3 か月間の「居住地点指定監視」の強制措置を受け、2019 年 9 月から予定していた香港大学での博士課程を断念せざるを得ませんでした。2020 年 1 月 17 日に彼女は保釈されました。しかし 2021 年 9 月 19 日に彼女は再び逮捕されてしまい、翌日の 9 月 20 日から英国チーヴィニング奨学金を得てサセックス大学の博士課程でジェンダーと開発を学ぶ計画がつぶれてしまいました。

2021 年 9 月 19 日、黄雪琴は広州で職業病の権利に取り組んでいた王建兵と一緒に広州警察に突然逮捕されました。警察は「国家権力転覆扇動」の容疑で王建兵の自宅で 2 人を逮捕し、「居住地点指定監視」を実施しているのではないかと疑われている。王建兵の自宅に友人たちと毎日のように集まっていたことが理由ではないかと思われます。家族からの再三の要請にもかかわらず、警察は家族に正式な逮捕通知を提示しないだけでなく、容疑や措置の内容も明らかにしていない。そして、家族に対してこの事件に関して口外しないよう、外部と連絡を取らないよう、メディアの取材を受けないよう警告しました。（2021 年）10 月 26 日は彼女ら２人が失踪してから 37 日目になるが、友人らは 2 人の拘留状況について何ら知らされていない（中国の法律では、公安当局は、検察機関が逮捕または釈放を決定するまで、最長で 37 日間市民を拘留することができる）。

【訳注】
2021 年　9 月 19 日　午後３点ごろ，広州の警察は王建兵の自宅で王建兵と翌日出国予定だった黄雪琴を一緒に拘束。
2021 年 10 月 27 日　広州市公安局は「国家政権転覆扇動」容疑で正式に逮捕。
2023 年　9 月 22 日　広州市中級人民法院（地裁）で非公開の審理。
2024 年　6 月 14 日　広州市中級人民法院で、黄雪琴５年、王建兵３年６個の実刑判決。黄雪琴は即時上告。

2020 年 10 月、台風が接近していた。黄雪琴は階下の監視カメラを撤去する予定で、天候悪化の警報をスマホで知って喜んだ。

保釈されてから半年以上が経過したが、彼女の生活はまだ平穏に戻っていない。彼女は、香港の容疑者送還条例反対の運動に参加し、それを記録したことで３ヶ月間拘束され、国保＝公安警察（中国国内の治安維持を管理する警察部門）による定期的な「訪問」のリストに記載されることになった。日々の警察からの嫌がらせ、逮捕による心的障害への対応に加えて、家族に与えたストレスやトラウマをどう解消するかが課題となっていた。ま

た、保釈の条件により、居住地点指定監視に置かれている間の体験を明らかにすることができない。これは自由に発言することをモットーとしてきたジャーナリストにとっては、通常よりも大きな剥奪感と抑圧感を感じることになる。

ある日、黄雪琴が愛犬を連れて階段を下りると、階段の入り口にあるゴミの分別ステーションの防犯カメラの台数が増えていることに気がついた。彼女は、この地域にある20のゴミ分別ステーションを歩き回り、自分のところのカメラだけが増えていることを突き止めた。明らかに彼女のためにカメラが設置されていたのである。

黄雪琴は、台風の到来を利用して監視カメラを取り壊すことにした。

「取り壊す」という考えは彼女の友人らを勇気づけた。中国#metoo運動のきっかけをつくったニュースを報じたジャーナリストとして、黄雪琴は常に冷静かつ合理的な方法で社会正義のために戦うことを主張してきた。彼女は独立した調査報道を行い、社会の不公正を記録する記事を書き、被害者が正義を実現するためのリソースを導き、支援署名を発起し、公の場でスピーチを行い、トレーニングを組織してきた。彼女の友人たちは、黄雪琴のやり方を穏健だと感じていたので、彼女が監視カメラを取り壊そうと提案したとき、みんなつぎつぎ賛同して、その方法を考えるのを手伝った。

台風が来ては去り、ついに黄雪琴は、より「雪琴」らしい方法で抗議の意を表した。彼女は毎日、犬の散歩の時に監視カメラの下で、「違法なカメラ設置、情報開示を求める」というプラカードを掲げ、「Do you hear the people sing?」（民衆の歌）を歌った。さらにジョージオーウェルの『1984』を朗読しようと計画していた。国保（公安警察）との定期的な面会の際に、彼女は施行されたばかりの「個人情報保護法」のコピーを渡して、監視カメラの設置手順や購入費用を明らかにするよう要求した。

公安警察と面会した翌日、黄雪琴は監視カメラの下で詩を朗読しようと階下に降りて行ったが、見ると監視カメラは取り外されていた。彼女はその様子を自分のSNSのアカウントに書き込んで、「#抗争有用（闘争は有効）」というハッシュタグをつけた。

海辺でポーズをとる黄雪琴。

記者の監督権…「息をするくらい自然なこと」

抗議する者（プロテスター）。これはそもそも黄雪琴が選択した役割ではなかった。国営メディアの記者だった彼女は、体制の改良を信じ、積極的に執筆活動や寄稿を行ってきた。

2010年に大学を卒業した黄雪琴は、中国通信社広東支局の記者となり、その後、「新快報」や「南都週刊」などの新進気鋭のメディアで調査報道の記者として活躍した。

2000年から2015年にかけて、中国大陸のメディアは、栄光に満ちた、しかし短命に終わった世論の監督という時代を経験した。「南方週末」と「南方都市報」を中心とする南方報業媒体は、社会改革を推進する主要なメディアの一つであった。2003年、「南方都市報」は「孫志剛事件」〔身分証明書を提示しなかった「農民工」が拘留され死亡した事件〕を報道し、長年続いた「拘留・送還制度」〔理由なく非居住者を拘留し戸籍地に送還できる〕を廃止するよう政府に働きかけた。同年、同紙は当局の報道封鎖を突破し、広東省でのSARSの流行を報道し、当局に情報公開を促した。2012年、『南都週刊』に掲載された連載記事「徹底調査・王立軍」は、中国共産党の高級幹部の政治闘争を徹底的に暴露した〔王立軍は習近平のライバルと目された薄熙来の部下だったが2012年に中国・成都のアメリカ領事館に逃げ込み薄熙来の悪行を暴露し薄の失脚のきっかけを作った。その後、職権乱用や収賄の罪で15年の懲役刑の判決を受けた〕。

黄雪琴がメディア業界に入ったのは、この黄金時代の末期だった。彼女の住む広州市は「中国で最も市民社会に近い」と評判だった。毎週行われる「市長と市民の日」で、彼女は市民から市長へ直接発せられる質問を記録した。当時の広州市長だった万慶良は「珠江帝景マンションの家賃は月600元」と発言し、メディアから批判を浴び、市民から笑いものになった〔豪華マンションをたった600元で借りられるはずがなく、不動産業者と癒着があると市民からは

拥擁された。その後 2014 年に規律違反で失職、2016 年に無期懲役が確定〕。当時、黄雪琴は記者として監督権を果たすことは「息をするように自然なこと」だと考えていた。

黄雪琴は、社会の暗部を暴くためにペンを使い始め、報道で社会変革を促進することを楽しみにしていた。ベトナムの子豚密輸に関する彼女の調査報道は、検疫局の官僚２人の更迭につながった。深圳の自閉症児に関する彼女の記事は、市民団体の支持を集めた。その時も、公権力との駆け引きが必要で、地元の官僚との騙しあい、報道規制が出る前に情報を入手し、記事を出す方法を考えることも必要だった！これは中国のジャーナリストが常に学ばなければならなかった教訓である。

黄雪琴はこの時期にすくすくと成長した。後に彼女を苦しめることになる徒労感に囚われることはなかった。少なくとも、記者として不正について書き、自分のやりたいことをすることはできた。 このため、黄雪琴は多くの知識人と同様、体制の自己変革を信じていた。彼女らは、メディアの監視、知識人の助言、法律家による法治の実施、市民社会の発展を通じて、体制はどんどん良くなっていくと信じていた。まさか言論が徐々に締め付けられていくなどとは考えたこともなかった。

2013 年初頭、地元紙「南方週末」の新年の社説差し替えの事件の後、状況は急転した〔リベラルな風潮で知られた同紙は、当トップに就任した習近平の「中国の夢」を借用して、新年の社説に「中国の夢、憲政の夢」というタイトルを掲げたが、それが無断で差し替えられたことに記者たちが猛反発した事件〕。 2016 年 2 月、習近平は中国中央テレビ（CCTV）を視察し、「党メディアは党の立場に立つべき」と明言し、報道に「方向性」を要求した。 これ以前に党機関紙が地方都市で新聞を発行したり、市場動向に左右される空間が存在したが、それは徐々に姿を消した。

黄雪琴は、調査報道部門が閉鎖されたり、数が減らされたりするのを見ていた。彼女の所属していた調査報道部門は「イノベーション部」と改名され、スタッフは十数人からわずか数人に減らされ、やがてみんな辞めていった。体制内で世論を論じる空間どんどん小さくなり、できる報道も少なくなり、給料も以前ほど良くなくなっていった。

そのような状況のなか、黄雪琴は 2015 年に新聞社を辞め、独立ジャーナリストになることを決意した。彼女が少しセンシティブな記事をインターネットプラットフォームに投稿して、それが検閲にひっかかったときでも、プラットフォームの運営者は「弊社の記者ではないのでコントロールできない」と言いのがれすることができた。また、執筆者自身も「自分は独立して記録を文章化しているだけで、プラットフォームに対して説明責任はない」と言い逃れすることができた。

黄雪琴は、独立した記録活動の重要性を信じている。歴史の隙間に独立した記録を残すことで、将来、国家権力によって統合されてしまったナラティブに対抗し、記録し、証言することができるかもしれないからだ。

黄雪琴は中央人民テレビ局の番組「中国の声」と騰訊ニュースの共同制作である《聽我說》（私の話を聞いてよ）でセクシャルハラスメントに対抗した物語を語った。2019 年に逮捕されるとこの動画は見られなくなり、彼女の軌跡もインターネットから削除された。

無所属で独立した調査報道ができることを知る

2015 年８月、天津港の危険化学品倉庫で危険化学品の無許可設置による爆発事故が発生し、最終的に 165 人が死亡、798 人が負傷した。死者のうち 99 人は消防士だった。

当時、黄雪琴は仕事を辞めたばかりで、半年間アメリカに留学していた。 ニュースを知り、さらに中国のメディア関係者たちが現場取材ができないことを知ると、中国の消防士たちの苦境と比較するために、ニューヨークに赴き９・１１テロの際にアメリカの消防士たちによる救助経験や現状についてインタビューすることにした。中国国内の新聞社の編集者とこの問題について話し合った後、彼女はすぐにシアトルからニューヨークまでの列車の切符を予約した。

車中で関係部署の連絡先を検索し、ひとつひとつメールを送り、電話で取材依頼をした。 苦労はしょっちゅうだった。インタビューを申し込んだ相手から「あなたは誰ですか？ どこの団体に所属しているのですか？ イン

タビューの目的は？なぜ今になって 911 事件に関心が？」と何度も聞かれた。雪琴が質問にｎ答えると、電話は別の部署に移され、そこでまた同じ質問が繰り返された。

ニューヨークに到着した彼女は、予約していた民泊先に連泊できず、スーツケースを持って市役所、ニューヨーク警察、消防署、コーヒーショップを行ったり来たりしなければならなかった。結局、黄雪琴はようやく取材先を見つけ、スターバックスで一気に記事を仕上げたが、深夜になって傍らのスーツケースを見て、まだ宿泊先が決まっていないことを思い出したのだった。

《「911」14 週年，三千餘救援者確診患癌》（14 年目の 911、三千名あまりの救助者が癌と診断）の記事が発表されると、たちまち中国の主要メディアの見出しを飾り、同業者たちは皆、記事の「炎上」を祝福したが、黄雪琴はすべての賞賛やコメントを読む暇もなく、ニューヨークのコインランドリーで、この 1 週間たまった洗濯物をどうやって洗えばいいのかに頭を悩ましていた。

この路上で寝泊まりしかけた経験も、黄雪琴に独立ジャーナリストとしての自信を与えた。

その後、彼女はカンボジアに行き、地雷の村に入り、地雷敷設や地雷除去の元戦闘員を訪ね、民間人が受けた内戦の被害について学んだ。また、シンガポールに行き、ゴミ分別システムを研究し、広州のゴミ分別の現状と比較調査した。さらに、ベトナムの刑務所や病院を訪ねたり、アフリカの麻薬密売人に騙されて麻薬密売に手を染め、外国で無期懲役を言い渡された中国人少女についての記事を書いた。

これらの報道以外に、黄雪琴は性暴力事件に関する独自の調査報道と、中国における#MeToo 運動を推進したことでも知られている。

図らずも中国#MeToo 運動の顔の一人に

2017 年 10 月、アメリカの女優アリッサ・ミラノは、人々が性的暴力の蔓延を認識できるよう、#MeToo のハッシュタグを使って性暴力を受けた経験をオープンにするよう女性たちに呼びかけ、世界的な#MeToo 運動の火付け役となった。そのとき黄雪琴は、アジアジャーナリスト奨学金プログラムでシンガポールに滞在していたが、多くのジャーナリストとセクシャルハラスメントについて話した際、ほとんどがセクシャルハラスメントを経験しているにもかかわらず、ほとんど全員が沈黙していたこと知った。

彼女は、メディア業界におけるセクシャルハラスメントがどれほど深刻なのか、また、マイノリティのために声を上げることの多いジャーナリストが、なぜ自分たちが受けた不当な仕打ちについて沈黙しているのかを知りたいと思った。そこで彼女は 10 月に中国に戻り、すぐに「中国の女性ジャーナリストの職場におけるセクハラ」に関する調査を開始した。

この時、羅茜茜が母校である北京航空航天大学の懲戒委員会に対して、10 年以上前に指導教官の陳小武からセクシャルハラスメントを受けたと実名で告発したが、なんら対応がとられず、途方に暮れていたところ、黄雪琴がこの調査を開始したことを知り、すぐに「実名で告発したい」と連絡した。

羅茜茜の体験を知った黄雪琴は、証拠を集め、弁護士へ連絡し、報道してもらおうとメディアに連絡を取った。しかし、伝統的なメディアは、世論のスペースは限られており、この問題はデリケートであるため、ウェブ上の個人のニュース・アカウントでこの話を暴露して、メディアがその記事をフォローできるようになることを望んだという。

2017 年に中国の女性ジャーナリストのセクシャルハラスメント被害に関する調査を提起した黄雪琴。

2018 年 1 月 1 日から 1 月 4 日にかけて、黄雪琴は自分のアカウントをつかったウェブサイトで、羅茜茜の実名を含んだ複数の被害者の証言と写真、音声データなどの証拠が掲載された「北京航空航天大学セクハラ事件」の調査報道を掲載した。1 月 4 日には、キャンパス内に反セクハラ機関を設置することを提唱する共同署名の呼びかけを公表した。このキャンペーンには 3000 人以上が参加した。羅茜茜が実名告発したウェイボー〔中国のミニブログ・掲示板〕の書き込みは、その日の午後までに 300 万回以上の閲覧に達した。北京航空航天大学は休日にもかかわらず異例の当日の回答を行い、調査を開始し、陳小武の職務を一時停止することを公表した。また教育省は、セクハラを一切容認せず、キャンパスにおける長期的なセクハラ防止メカニズムの導入を検討するとの文書を発表した。

こうして黄雪琴は羅茜茜と共に中国の#MeToo 運動の幕を開けた。陳小武が処罰された後、大学や行政機関やメディアでのセクハラ事件がさらに多数発覚した。ピークの 2018 年 7 月には、1 カ月で 23 件のセクハラ疑惑が暴露された。被害者たちは、自分たちが遭遇した性暴力とその被害について語り出すとともに、キャンパスや職場にセクハラ防止の仕組みを導入し、国内のセクハラ防止法を整備するよう社会に対応を求めた。当時、94 校の大学の 8000 人以上の学生が、自分の母校にこの要望を伝える手紙を書くキャンペーンに参加し、セクシャルハラスメントに反対する世論をつくりだした。

深圳の大学で教鞭をとり、黄雪琴の親友でもあるシャーロット（Charlotte）は、黄雪琴が中国の#MeToo 運動で非常に重要な役割を果たしたと考えている。「彼女は、誰もが理解し共鳴できる言葉で女性たちのストーリーを語り、#MeToo の孤独な一人ひとりを結びつけました。彼女の書く物語はすべて、当事者の物語であると同時に、すべての女性の物語でもあります。」

一方、黄雪琴は「みんな黙ってるから私が目立っただけ」と自嘲する。セクシャルハラスメントに直面した他のジャーナリストたちは、声を上げられず、上げようとせず、上げたくもないと考えたので、自分が「図らずも」#MeToo 運動の象徴的な人物のひとりとなったという。

彼女にとって#MeToo 運動に深く関わり、被害者を弁護士やカウンセラー、その他の社会ネットワークにつないで被害者が正義を取り戻すことを支援したり、事件の経過を報告したり見守ったりすることは、ごく当たり前の仕事であったにもかかわらず、黄雪琴はすぐに当局からの監視の対象になった。彼女がかつて働いていたメディアや彼女が投稿していたプラットフォームからは、「誰かがあなたをチェックしていますよ」というメッセージが送られてきた。黄雪琴は警察からも頻繁に事情聴取を受け、セクシャルハラスメントに関する報道や学生を「扇動」するような報道をやめるよう求められた。ある大学の学生によると、大学の経営陣が大学の学生たちに対して、黄学琴は「学外勢力」であり、彼女に近づかないよう発言したことも明らかになった。

当局は、彼女が学生を煽動して行動に参加させ、NGO と結びつけたと非難した。彼女の記事のほとんどは検閲され、削除され、彼女の人生は当局によって少しずつ消され、書き換えられていった。「黄雪琴」の名前で検索すると、ヒットするのは逮捕のニュースや散発的な#MeToo の報道だけだ。かつて彼女が力強く語った言葉や社会に何らかの変化をもたらしたようなメッセージ、彼女にとって最も充実した時期のものは、すべて効率化され強化された検閲マシーンによって無慈悲に消されている。

彼女の仲間の一人で、中国在住の外国メディア記者のアン（Anne）は、黄雪琴が中国の大学にセクハラ防止機関の設置を推し進めたのは、「対立的なものではなく、むしろ協力的なもの」であり、そのような機関を設置することが大学にとってどのようなメリットがあるかを伝え、セクハラ問題を解決するために協力したいからだと語る。

当時、大学におけるセクシャルハラスメント対応機関の設立はまだ先のことだったが、アンによれば、黄雪琴は「常に楽観的」だったという。

楽観主義は彼女の人生にも反映されている。以前、雪琴が友人たちと旅行に出かけたときに途中で車が故障した。深夜になって食べるものも泊まるところもなく、みんなイライラしていたとき、雪琴は突然叫んだ。「ほら見て、今夜は星がとてもきれい！」

留学できないのなら取材と行動を続けるだけ

警察が彼女と彼女の家族に嫌がらせを始めてからも、この楽観主義は続いた。2019 年９月、黄雪琴は法学の修士号を取得するために香港大学に留学する予定だった。しかしその直前、広東省の公安〔一般的に「国保（グォバオ）」と呼ばれる日本の公安組織と同じように警察内の治安対策組織。正式には公安局国内安全保衛隊〕は彼女を 24 時間拘束し、パスポートを没収し、彼女が香港での逃亡犯条例改正反対運動に関する記事を発表したことを理由に留学を阻止した。

2021 年９月３日、雪琴は facebook で「もう誕生日はそんなにうれしくない！」と投稿したが、その 16 日後に勾留された。

彼女が落ち込まなかったわけではない。やはり留学や奨学金申請は簡単ではないと。しかし、彼女はすぐに、留学できないのであれば、取材を続け、行動を継続するしかないと考えた。だが状況はさらに悪化し、2019 年 10 月 17 日、黄雪琴は公安の要請で警察署に出向き、パスポートをいったん返却することにしたが、それがまさかの罠だった。

当初、黄雪琴は拘置所に勾留された。当初、彼女は拘置所での時間を人類学のフィールドワークとして利用しようと思い、一緒に収監されていた女性たちの話を聞いて、彼女たちのために本を書こうと考えた。『女子監獄 A101』という書名も考えていたという。「101」は彼女が収監されていた監房の番号だ。

その後、指定居住監視措置〔警察が指定した場所で監視生活を強いられる措置〕となった彼女の生活はあまり良いものではなかった。アーティストの艾未未〔アイ・ウェイウェイ＝著名な反権力アーティスト〕も以前、ある展覧会を理由に、警察の監視措置下に置かれたことがあった。見知らぬ場所で弁護士にも家族にも会えず、外部の人間とは完全に遮断された生活。狭い空間で、不規則な取り調べを除けば、24 時間、少なくとも 2 人の監視者がそばにいて、監視対象が何回伸びをし、何口食べ物を食べ、何杯の水を飲み、トイレに行き、シャワーを浴び、どのように眠るのか、すべての動作や表情を毎日毎日記録する。

プライバシーのない抑圧的な環境の中で、雪琴は看守にも同情する。看守は、彼女がトイレに行った後、便が柔らかいか硬いかを確認しなければならず、眠りに落ちるときに何回寝返りを打ったかを記録しなければならないからだ。ただ、彼女自身も話し相手はなく、狭い部屋を歩き回るしかできない。そして妄想のなかで、「星の王子様」の薔薇の花のエピソードを思い浮かべ、王子様が遭遇した 5000 本の薔薇の一本一本がどんな形をしているのか、それは王子様が愛しんだ薔薇とどう違うのかを想像することしかできなかった。

このような浪漫主義的な楽観主義は、酷い経験した人にはあまり見られないそうだ。黄雪琴曰く、自らの酷い境遇を受け入れることができたのは、ジャーナリストとして、多くの人々の酷い境遇を読み、聞き、そして書いてきたからだという。歴史に散った林昭〔1962 年に「反革命」の冤罪で上海監獄に投獄され、文革が始まった後の 66 年に銃殺された学生〕、孤高の精神的自立を保った陳寅恪〔文革で迫害された歴史学・文学史の泰斗〕、そして広場に向かい戻って来ることができなかった若者たち。

これは黄雪琴に安らぎと力をもたらした。一方で彼女は、これもまた一種の逃避なのではないかとも分析する。実際、2018 年以降、彼女は時折「失語症」的な状態に陥ることがあった。ある時期、彼女は何も言いたくない、何もできない、大きな虚無感と絶望感に包まれたという。

おそらく 2019 年は息継ぎの時期だったのかもしれない。入学前に香港大学を訪ねたことがあった。まさかそのタイミングで逃亡犯条例改正反対運動が起こるとは誰も予想していなかった。

「経験したことを知らないフリなんかできない」

6 月 9 日、逃亡犯条例の改正に反対する 100 万人以上の香港人の平和的なデモ行進があった。社会運動の歴史的な現場に際して黄雪琴は「声を上げ、参加し、目撃し、記録する」という心構えで初めてデモに参加した。

彼女はデモ隊と一緒に歩きながら、その様子を写真やビデオに撮って SNS の友人たちに送ったが、それはブロックされ、削除された。香港の運動は中国の治安政策にとって最も敏感な話題となった。中国では、この運動に関する情報はすべて検閲され、当局はプロパガンダマシーンを稼働させ、デモ参加者が「外国勢力と結託」し「一国二制度」に対して暴力で反対する「香港独立派」の「暴徒」と呼んだ。

黄雪琴はその現場で、中国政府のいう「暴徒」がどれほど秩序あるデモを行い、礼儀正しく道を譲りあい、そして平和的に自らの主張を表現しているかを目の当たりにした。また、政府のプロパガンダが、この運動にレッテルをはり、極悪人扱いすることによって、世論がどれほど引き裂かれたのかも目の当たりにし、真実を記録することの重要性を理解した。 映像や画像を送れないことをがわかると、彼女はテキストで、「香港人の 7 人に 1 人が悪法に反対するために街頭に出てる」と送った。これを見た友人たちは彼女に「香港で何があったの？ 何に反対なの？ なぜ反対するの？」と返事をくれた。彼女は辛抱強くひとつひとつ説明した。

その後、ウェイボー（微博＝ブログサービス）やウィーチャット（微信＝コミュニケーションアプリ）からデモの痕跡は消され、彼女自身のアカウントは凍結された。政府メディアは「暴徒が香港で騒ぎを起こした」という報道しか許さなかった。彼女は、この運動が 30 年前の北京の天安門事件のように国家権力によって抹殺され、書き換えられてしまうことを感じ、使命感と責任感が湧き上がり、歴史の断片を記録するジャーナリストの責任を負い、できるだけ現場の真実の声を再現するために最善を尽くしたい。そんな思いから、彼女は実名で「私の逃亡犯条例反対デモの記録（《記録我的「反送中」大遊行》）という文章を書いた。

記事を掲載した翌日の深夜、警察は広州にある家族の家を訪ねて、「沈黙」するよう要求した。そして黄雪琴は中国に戻ったその日の夜に逮捕された。

同業者のアン曰く「彼女は香港の逃亡犯条例反対運動を報道するというジャーナリストとしての義務を果たしただけで、それ以外は何もしていない」。

黄雪琴は、将来の弾圧など、様々な事態を熟考したうえでもなお、ジャーナリストであるなら、しかも現場に居合わせたジャーナリストであるなら尚のこと、事件を記録に残さないことはジャーナリストの義務を放棄することになると考えた。「私の逃亡犯条例反対デモの記録」の最後で彼女が言ったように、「自ら経験して目撃した以上、知らないふりをすることはできないし、記録しないなんてできないし、座して死を待つこともできない。無限の闇夜のなか、わずかに一筋の真実と光が差し込むとき、こうべを垂れて見て見ぬふりをすることなど決してできない。」

「一秒の暗闇では真実を隠すことはできない」――これは獄中の暗闇の時期に彼女に力を与えてくれた言葉である。

暴力的な国家機構は通常、反体制派や活動家に対し、まず「鉄拳」と暴力で接し、その後、長期間の拘留、教育、転向を強制する。投獄された者にとって、最初の威嚇や脅しは徐々に薄れていくが、その後は敵との長く果てしない対峙の時期となる。

黄雪琴は、読んだ本、旅した場所、出会った人々を数え切れないほど思い出し、考えることを持続させた。長期にわたる転向教育を前に、彼女は自分が女スパイだと想定することにした。常に熱情的で本気で立ち向かおうとして消耗するヒロインとは異なり、拘束された女スパイは、自らの長所を生かして、頭をフルに活用して狡猾に対応し、自身の身を守りつつ、自らの使命も忘れない。

しかし、彼女はこの「スパイになった自分を想像する」というアプローチに警戒心を抱く。なぜなら、それは転向教育の目的にかなうものだからだ。誠実な人間を黙らせ、芝居をさせ、裏表を使い分ける。彼女はそんな態度は大嫌いだった。芝生に座りこんで、人々と自由に話すことを好んだ。誠実と真実、それは彼女にとってとても大切なことだった。

2021 年秋、黄雪琴は英国政府のリーヴィニング奨学金を獲得し、その年の 9 月 20 日からエセックス大学（University of Sussex）でジェンダーと開発に関する修士課程に入学する予定だった。

2020 年に黄雪琴を支援したことのある小北さんは、初めて会ったときから、彼女が特に原則を重んじる人だと感じていた。チームに分かれてゲームをしたのだが、各チームが同じ数字を選ぶと得点となり、あるチームが他のチームと違う数字を選ぶと、違う数字を選んだチームは加算され、同じ数字を選んだチームは減点されるというルールだった。チーム同士は交渉してもよく、その交渉で相手を誘導したり騙して最も得点の高いチームが勝者となる。

その時の様子を知る小北さんによると、ゲームが始まると、あるチームは勝つために相手を騙す方法を選んだ。しかし黄雪琴は、チーム同士で信頼関係を築くべきだと主張し、相手を騙して得点するゲームのルールに操られてはならないと主張した。黄雪琴はその時とても感情的になって、最後には涙さえ流したという。

黄雪琴にとって、感受性を維持し、痛みや怒りの感情を持ち続けることが、このふざけた時代のなかで、より良いジャーナリストになる唯一の方法なのである。

「声をあげないジャーナリストなんてありえない」

〔2020 年 1 月 17 日に〕保釈されたあと黄雪琴は時々悪夢にうなされた。一度だけ、彼女は再び投獄される夢を見た。夢の中では、暴君がいて、理由はわからないが囚人たちを蒸して料理して食べようとしたが、囚人たちはあまりにも下等だと思い、自分の大臣を料理したが、指まで食べたときに指輪に気がついた暴君は激怒し、続けて他の人間をとした。夢の中で雪琴は怯え、怒り、暴君を批判して退治しようとしたが、家族に口をふさがれ、「あんたが食べられるわけではないので取り合わないように。大声も出さないで」と家族に言われた。雪琴ははっと目を覚ました。彼女は連絡が途絶えた市民ジャーナリストの張展、陳秋実、李澤華のことを思い出した〔3人ともコロナが始まった武漢で取材を行ったことで弾圧された〕。

彼女は常に、ヒロイズム陥ってはいけないと自分に言い聞かせていた。多くの人に比べれば、彼女の人生は破滅していないし、肉体的な拷問も受けていないし、多くのトラウマに苦しんでいるわけでもない。それはとても幸運なことだ。彼女は今でも、このばかげた時代とその中でもがく人々を観察し、記録することにエネルギーを注ごうとしている。

もちろん、獄中での体験は彼女に傷跡を残している。警察の嫌がらせと監視は続き、彼女は広州を離れることができず、公安が突然訪問するたびに、飼い犬は激しく吠える。

獄中での経験を公表することは禁じられたが、保釈から数ヶ月後、黄雪琴はやっとペンを取り、日記を書いて、ごく限られた友人にシェアすることができた。友人たちによると、彼女の日記には、警察がいかに彼女を苛立たせようとし、監視し、仕事を妨害したかが克明に記録されていたという。それを記録することを通して、雪琴は少しずつ力を取り戻していった。

「声をあげないジャーナリストなんてありえない」は彼女の記事のタイトル。彼女は取材と記録にこだわったが、匿名で発表することしかできなかった。彼女がインタビューして書いた記事「女性アクティビスト李翹楚（女性抗争者李翹楚）」は、2021 年、アジア出版者協会賞（SOPA）の女性問題報道部門で金賞を受賞した。だが、まさか黄雪琴がまた李翹楚と同じような運命をたどることになるとは知る由もなかった〔市民活動家の李翹楚さんは 2021 年２月に勾留、2024 年２月５日に山東省臨沂市の裁判所で「国家転覆扇動罪」で３年８か月の実刑判決を受けた〕。

インタビューの最後に、私は彼女に「あなたの理想とする社会は？」と尋ねると、彼女は「魔物たちが混沌としながらも、誰もが自然で自由に成長でき、妖怪もいれば闘士もいるような、百草の庭園のように、さまざまな草花が咲き乱れる社会」と答えた。

さらに聞いた。「あなたの役割は？」

彼女はためらうことなく答えた。

「私は記録係。ペンとカメラを持って、それぞれの花がどのように成長し、咲き、枯れていくかを記録するの」。

そしてこう付け加えた。

「もちろん、自分も満開に咲かせるの」。

黄雪琴以外のインタビューイは仮名。

特約編集：雨猫

その後

2021 年　９月 19 日　午後３点ごろ，広州の警察は王建兵の自宅で王建兵と翌日出国予定だった黄雪琴を一緒に拘束。
2021 年 10 月 27 日　広州市公安局は「国家政権転覆扇動」容疑で正式に逮捕。
2023 年　９月 22 日　広州市中級人民法院（地裁）で非公開の審理。
2024 年　６月 14 日　広州市中級人民法院で、黄雪琴５年、王建兵３年６個の実刑判決。黄雪琴は即時上告。